

新聞名：「L i e s m a (リエスマ (光))」

2017年8月11日

記者：イルゼ・カルニャ

タイトル：「広い空は幸せ」



※写真

「日本人高校生3名のホストファミリー。ロケニ家はラトビアに興味を持っている地球の反対側にある日本の子供たちを喜んで受け入れ、ヴァルミエラ市、ラトビアの田舎、森、野原を紹介しました。

写真。1列目左から：エドワルドス、ユウスケ；2列目左から：カトリーネ、カスパルス、ネオ、ユキ、ダツェ。

『日本人高校生3名がこの夏ラトビアで特別な3週間を過ごしました。』

(敬称略)

ユウスケとネオ、ユキは大阪に住んでいる15～17歳の高校生です。関西地区で活躍している組織の協力を得て、日本から何千キロメートルも離れたラトビアのホストファミリーのところで夏休みを過ごすことができました。

若者たちはラトビアの文化や生活を学ぶため、そして、「新しい可能性と体験」を得るために、ラトビアにきました。レンツェニエキに住んでいるロケニ家は日本の子供たちにこの留学の環境を提供しました。ちなみに、ロケニ家が夏休み中に日本人の高校生を受け入れることは2回目です。

ロケニ家のダツェは次のように言っています。「留学生は去年も受け入れました。なぜホストファミリーになったのかと言えば、相互に他文化を理解し合いたかったからです。加えて、日本の子供も、自分の子供も多くのことを学んできたと思います。留学生は、3人とも全く違う環境で育てられてきましたが、共通点は多くあります。特に誠実な点やお互いを尊敬し合う点が見受け

られます。この子たちは多くのことに興味を持ち、新しい体験ができた大変喜んでいます。この他、静かで、丁寧、おとなしくするように意識して行動しています。時には止まって、ゆっくり考えることは恥ずかしくないことです。質問されたことに対し、よく考えてから答えています。そのため、我々の交流は簡単でした。日本文化とラトビア文化の違いにも気付きました。日本人はシンプルなことを大事にしています。例えば、人間関係、服装、生活などけばけばしいものをあまり好んでないようです。」

ダツェは普段教育センターで働いていて、様々な若者教育プロジェクトを担当しています。彼女は数多くのセミナーに参加し、ヨーロッパ各国での学習の機会を得ています。また、アジアの文化にも特別に興味をもっています。

「リエスマ (当新聞)」はすでにラトビアと日本の関係について書いたことがあります。日ラ関係は1991年に始まり、日本はラトビアの独立を最初に認めた国の一つでした。1993年よりリーガで日本語文化学校 (現在：リーガ文化学校) が開かれて、ラトビアでの日本語と日本文化の普及が始まりました。昨年、ネオが初めてラトビアを旅行して、関西日本ラトビア協会が考える通りの国かどうかを確認してきました。この組織は日本でラトビアのことを普及し、月に一回集まってラトビアの言葉や文化についての交流場を作っています。今回、この協会は日本の若者たちが有意義な旅行に参加できるように資金を集めて、参加者の募集を行いました。

この関西日本ラトビア協会の話も興味深いものがあります。法人の方も、個人の方もこの協会の会員になることができます。ラトビアで言えば「ライオンズクラブ」のような組織です。会員の中には、ヨーロッパやバルト地区関係のビジネスを行っている人もいます。協会は、留学生や高校生にも奨学金を与えています。この協会の支援を受けて、3人の高校生が今年ラトビアに来ることができています。協会は、これからもっと広く活動していくと期待しています。多くのラトビア人に日本で教育を受けるよう促しています。

「ラトビア人はとても優しく、オープンで、協力的な人だということに気づきました」ユウスケ、ネオとユキが述べました。3人とも週明けに「リエスマ」の出版社を訪れました。

16歳のユウスケはラトビアの自然にあこがれて、「保護区」にたとえました。

「ここは自然の声が深く感じられることができ、気持ちがいいです。ここは誰でも自由に森へベリー・キノコ狩りに行くことができます。他にはヴァルミア市や「冒険の森 (アドベンチャーパーク)」へ行って、海で泳いでいました。祖父母は高層ビルのない田舎に住んでいます。日本の田舎にも湖や自然がありますが、ラトビアほど広くありません。ラトビアでは自然に囲まれます。」とユウスケが言いました。ネオが「毎日は驚きのようだ」と言いました。

「空は遥か彼方まで見渡すことができます。そんなラトビアの広い空が好きです。山も、高い建物もありません。雲も空もとても大きい」とネオが感じました。ユキは次の通り述べました「ラトビアの夏が好きです。かなり暑いですが、大阪みたいに蒸し暑くならないからです。気温が35度以上になると生活も、仕事も大変になります。」その他、日本人はラトビアの夏日の長さに気づきます。長い日中を過ごすことができるのです。日本では、夜7時はすでに暗くなっていて、日の出は6時前です。

この発言を聞くと、ラトビア人と日本人の考え方の大きな違いを感じることができます。多くのヨーロッパの若者はきっと生活の面の違いに気づくでしょう。この子供たちはより深く、賢明に考えています。

ネオは家族内の環境をとても楽しんでいました。素晴らしい人だけではなく、ペットにも会い

ました。家に愛犬がいて、ヴァルミエラの馬小屋で馬との時間も楽しむことができました。

「料理も新鮮で、かおりが素晴らしい。すべての野菜には素材の味があるとわかりました。ラトビアではすべてがかおりに満ちていて、庭から新鮮な素材をとることができます。」とネオが感動しました。

ダツェはホストファミリーとして、子供たちに家族の日常生活を紹介したいと考えていました。アヒルを飼っている近所の人のところへ卵を取りに行ったり、隣の農家から牛乳をもらったりしていました。子供たちはすべての料理が口に合って、大きなダイニングテーブルでは家族の全員が集まって昼ごはんや晩御飯を食べ、テラスでは夕飯や外での焚火を楽しんでいました。

「私たちは生活の習慣を変えずに、いつも通り暮らしていました。子供たちは家族内の文化も見て、我々を感じてくれたと思います。私たちは何でも話し合って、よく触ったり、ハグしたりして、自由に自分の愛情を表しています。日本では家族内の関係と気持ちの表し方は違うでしょう。日本人にとって家族は非常に大事ですが、自分の気持ちはあまり表に出していないことがわかりました。」とダツェが述べました。3週間弱の短い期間のうちに子供たちにヴァルミエラ市や地方の別荘、野原、森、海、首都リーガを案内できました。加えて、博物館、展示会、首都の建築も観察しております。

「占領博物館へ行って、歴史の話もしました。皆が歴史に興味をもっていました。リーガの旧市街も回って、中央市場で田舎の幸の豊かさを味わいました。家でヤーニのチーズ（夏至祭に食べるもの）やピロシキを作り、女の子たちは買い物も楽しんでいました。子供たちも、私たちもとてもいい思い出ができました。子供たちは今週帰国しますが、これからも日本人にラトビアを紹介できる機会があれば、喜んでやりたい」とダツェが言いました。

「この子供たちの意欲的な姿勢に感動しました」。ダツェの子供は今14と11歳です。

「長女のカトリーネは日本文化に深い関心をもっています。将来にうちの子たちもこの遠くて、不思議な国に留学するでしょう。」

「リエスマ」は日本の若者の将来の夢について伺いました。皆が自分の人生の歩みがまだわからないので、よく考えてから、答えてくれました。ユキはスタイリストになりたいくて、ユウスケは日本語教師の道を考えて、ネオは研究、科学、または、国際関係関連の仕事を目指すようです。どちらの場合でも、3人とも学びの場をとても大事に思っていて、この国際交流プログラムを通じて、学校では学べない体験を積んでいます。

翻訳：Antipova Dana

編集：佐竹 竜俊